はるかな国 とおい昔・中島敦の魂

中島甲臣

はるかな国　とおい昔　（ハドソン）

悠々たるかな天壌
遼々たるかな古今
五尺の小躯を以て此の大をはからんとす
ホレーショの哲学、竟に何等のオソリチーを価するものぞ
……以下略……　（藤村操）

冒頭の句、本稿と相い渉るや否や

目　次

はじめに……九一
人間への制限　身体……九四
本稿の構成……九六
思考……九七
自覚……一〇三
空間意識……一〇七

時間の感知……一一一
死……一一三
無限の時間の中の生と死……一一八
かめれおん日記、狼疾記とその系列……一二二

はじめに

敦の小説、私記の中に例えば

『何故俺は俺を俺と思うのか？　他のものを俺と思うても差し支えなかろうに。俺とは一体なんだ？』（悟浄出世）

のような、殆ど解答に窮するような「難問」や

『此の島の人間どもが死に絶えた（それはもう殆ど確定的な事実なのだ）後は、この影のような・砂の亡霊のような小蟹共が、この島を領するのであろうか。灰白色の揺動く幻だけが此の島の主となる日を考えると、妙にう・

・そ寒い気持ちがしてきた。……先刻夕方の浜辺で島民共の死絶えた後の此島を思い画いたように、今、私は、人類の死に絶えてしまった後の・誰も見る者もない・暗い天体の整然たる運転を―ピタゴラスの云う・巨大な音響を発しつつ廻転する無数の球体共の様子を想像して見た。何か、荒々しい悲しみに似たものが、ふつと、心の底から湧上がって来るようであった。』（寂しい島）

のような、読むものをして何か底なしの深淵に引きずり込まれるような感じをもたせかねない不気味な記述が見られる。

組織的に渉猟して提示したわけでなく、唯思いついたままに例示したのみであるが、敦の小説、私記の中にはこの様な言辞は可なりの頻度で散見される。

敦の示したこの様な「考え」は、何かしら人間の思考の限界を示しているように感ぜられる。

人間は、その特性を誇張して云えば、天駈けるわけでもなく、地に潜むわけでもなく、直立二足歩行、大凡時速四粁、一日四十粁地上を彷徨し、食糧収集の生活を行い、ほぼ四十年で生涯を閉じる生物であった。ネアンデルタール人は七万年頃前に現生人類と交代したと云われているが、人間の身体の基本的構造はその時期と殆ど変わっていないだろう。脳の構造もまた同様であろう。人間は、身体も精神も、その様な生き方に適合するように造られている。別な言い方をすれば、身体、精神の構造がその生態を決定している。

この様に考えてくると、人間の心の働きは、敦の示した様な事象に対処するようには作られていないような気がする。比喩的に云えば、神様が人間を作るとき、将来人間がその様なことを考えたり、その様な事態を意識するようになろうとは予想せず、それに応ずる能力を付与することは忘れたのではないか、とさえ想定される。

しかし一方、敦の示したこの様な「考え」は、単に敦という特異な人物の特異な思考に留まらず、一種の普遍性を持つ。考えを続けて行けば必然的に到達する事態のようにも思われ、我々の求知心を刺激する。

この様に、「解決せらるべき事態」は、考察の対象として取りあげるにはふさわしくなく、且つ同時にふさわしい、と云う矛盾した性格を内蔵しているようにも見られる。

さて、一応にもせよ、この様な事態を明らかにしようと思えば、本来人間の思考は、何が可能であり、その限界は何処に引かるべきか、の考察から始めねばならぬであろう。

処が、この様な考察自体が既に矛盾を含んでいるように思われる。何故なら「眼は一切を見るが、自らを見ることは出来ない……」（悟浄出世）にも拘らず、「見ている眼を見ようとする」心の働きに類するからである。自己循環と云う本質的な難問に直面する。

この様に、解決せらるべき課題も、解決しようとする精神の働きも、共に矛盾を含んでいて、しかもこの矛盾は、大袈裟に云えば人間的存在自体が持つ矛盾である。

難問である所以である。

当然考察は主題にを巡り彷徨することになろう。

尚、以下の記述は、課題の性格上、言及する範囲が多岐に亘るが、筆者はその何れにも素人である。しかし同時に筆者が「考え」たこともまた事実である。

本稿は、前稿の「中島敦・覚え書き二・思考の哲学的傾向」と同様に、素人的「私製哲学概論」めいた内容を蔵することにもなろうが、その点は寛恕されたい。

人間への制限　身体

此処では専らこの様な人間の精神の本来の能力を考えようとするわけであるが、論旨を明確にするため、分かりやすい身体的条件から考察する。

先に直立二足歩行に言及したので、その関連を考えてみる。

生物の行動の目的は、個体維持と種の維持にあると言われる。個体維持に限れば、俗に云う「喰うか喰われるか」の関係である。人間もその例に洩れない。人間は「喰われない」為にインパラの様に早く走り、「喰う」ためにチータの様に早く走ることは出来ない。「喰い且つ喰われないために」人間はそれとは別の道を選択した。その道が、原始的ながら文明の始まりになる。が、それは扨て措き、人間は、生死に関する基本的行動においても早く走れる動物ではない。「本来的」に人間は歩く動物である。

人は歩いているときはめったに「衝突」することはない。相手の認識、歩行速度、退避の行動、など、それに対する十分な時間的余裕がある。人間はその様に出来ている。走行の場合はそれだけの余裕はないことがある。単に走るだけでもその様な危険性がある。自動車事故で人間に激しい被害が生ずるのは人間が高速で動くように出来ていないからである。

余談ながらこの様に考えてくるとマラソンなども奇妙に見えてくる。人間は本来四十粁も連続して走る必要はない。マラトンの勝利の報告者は常ならざることをした。だから歴史に名を残し、且つ本人は疲労のために死んだ。人間は潜在能力や適応性が高いので、意外な能力を発揮することもあるが、多分四十粁連続して走る様には出来ていないだろう。マラソン選手は足の故障が多く、女子では骨のカルシュウムの欠損が起こるのは、「本来の機能」に則していない行動の当然の帰結である。

しかし一方、人々はスピートへ強い憧憬を持つことも事実である。これは前述の議論に矛盾する事項であり、その解釈は難しいが、「昔」、人間が持っていた、逃げるにせよ、追うにせよもっと早く走れたらと云う願望と、後に示す「新しい」事象に対する好奇心が背後にあるように思われる。遅く歩くことはいくらでも出来るので、それは「新しい経験」にはならない。

本稿の構成

この様に、身体状況では人間の本来の能力の認識は割合にはっきりしている。

では、人間の心の働きの方はどうであろう。

「主題」との関連から、此処では、自覚、空間意識、時間の感知、死、無限の時間の中の生と死、に就いて考えてみる。

これらは相互に関連が多く、截然と分けて論ずることは出来ないので、論述の相互浸透は避けられない。更に、これらには、此処の主題である人間的存在の置かれている本質的な矛盾性が現れているが、空間認識にはその気配は多少希薄である。にも拘らず此処でそれもとり上げるのは、時間性との対比と云う観点と、「主題を巡る彷徨」の一端となるからである。

思　考

前記の課題に就いての「心の動き」を考察する前に、一般に「思考」の特徴を考えてみる。

此処でも、考察の態度は今までと同じで、筆者は「思考」と云う心の働きも、身体の活動と同じ様に、生物が生きて行くための道具の一つと見る。

先ず高名な西田幾太郎の「善の研究」の一句から。

たとえば一生懸命に断崖を攀(よ)ずる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏うする時の如き、全く知覚の連続といってもよい。また動物の本能的動作にも必ずかくの如き精神状態が伴うているのであろう。これらの精神状態においては、知覚が厳密なる統一を保ち、意識が一より他に転ずるも、注意は終始物に向けられ、前の作用が自ずから後者を惹起(じゃっき)しその間に思惟の入るべき少しの亀裂もない。

淡々として水の流れるような状態では「思考」は発生しない。

先の補食と云う現象に即して、敦の作品から例示すれば

隣人愛の説教者として有名な無腸公子の講筵に列した時は、説教半ばにして此の聖僧が突然餓に駆られて、自

分の実の子（もっとも彼は蟹の妖精故、一度に無数の子供を卵からかえすのだが）を二三人、むしゃ〳〵喰べて了ったのを見て、仰天した。……食い終わってから、……再び慈悲の説を述べ始めた。忘れたのではなくて、先刻の飢を充たすための行為は、てんで彼の意識に上がっていなかったに相違ない（悟浄出世）

先の「善の研究」で示されたような状況下では、比喩的ながら無腸公子は自分の子どもを補食したのさへ気づいていない。

「思考」はなんらかの意味で、先に述べたような淡々たる「流れ」が破れるときに発生する。人も困ったときに考え始める。

補食に就いて云えば動物の本能的動作、条件反射的行為が遂行できぬ時に発生する。

駝鳥の卵を割るために石をぶつける鷲や骨を割って髄を取り出すため上空から下の岩盤に骨を落とす鷲の姿は、以前アフリカの生態としてテレビに放映されていた。近頃では貝を道路に置いて車に潰させて中身を食べる烏がいることが報じられている。

彼らがこの様な手段をとる以前の状態を想像すれば、何れも困難に直面していた。だから「考え」たのである。蟻を食べるために細い枝を道具としてを使うチンパンジーも当然ながら事情は前記の諸例と同じである。

もう少し複雑な例としては、これもテレビで見たのだが、狼の群れがカリブーの群れを襲うのを上空から鳥瞰する

場面があった。ともに生死を掛けて雪原を恰も群れ飛ぶ鴈のように刻々と集団としての形を変えながら疾走している。狼は必ずしもカリブーより早くはない。カリブーの群れを脅し分割し先回りをし共同してしとめていた。「食うか食われるか」の自然の掟に従う凄絶ながら見事な計画的行動であった。

目的を設定し、それが成功するための手順を「考え」、その手順に従って順々と事態を進め、最後に目的を果たす。これが合目的的行為である。「考え」はその一環としての精神活動である。

さて、この様な行動が可能であるためには、先の狼の例からも分かるとおり、彼らは予めカリブーの「一般的」行動様式を知っていなければならない。「同様な事態からは同様な結果が生ずる」という認識を、多分意識にまでは昇っていないだろうが、既に持っている。先に例示した鷲も烏もチンパンジーも程度の差こそあれ事情は同様である。

この様に、合目的的行動の裡に、「一般性」と「因果関係」の認知と云う思考の要件の原初的形態が既に現れている。

遥か後世、と言っても現在からみれば遥か以前に、プラトンがイデア（一般者）を想定し、アリストテレスが普遍、その対極としての個体を想定したのは、上記の合目的的行為に起因する「同様な事象→共通性→一般者」の系列を想定すれば、思考に就いて思考する哲学者としては当然の心の働きである。アリストテレスが主として因果関係を考究する論理学を起こしたのも、プラトンの場合と同様に当然の帰結である。

思考と言っても多義多様であるから、単に合目的的行為の一環として統括するのは性急に過ぎるかもしれぬが、筆者にはやはりその様に思われる。思考の多面性はそれからの派生的現象と見る。

次に、後に言及することになる探求心と新しい現象に対する好奇心に触れたい。

先ず新しい現象に対する好奇心から。

何れもテレビ画面からの知識であるが、きたきつね、チンパンジーを含む猿の類など、一般に哺乳類の子どもは、新しい事象に対する好奇心が強い様に見受けられる。子ども達は親から生きて行くための諸々の知識を教わる。しかしこれから直面する現象は多岐多端で、とても親の与える「マニュアル」でカバーしきれるものではない。その様な「新しい」事態に対し、夫々の局面において自分で切り開いて行かねばならない。その場合、積極的にそれに立ち向かわなければならない。「新しい事象に対する好奇心」は、予めそれに備えて与えられている資質と見て良い。これもまた「利己的な遺伝子」の自己防衛的インプットである。

求知心という「知性」の最も重要な働きも、上記の思考圏内に吸収されていると筆者は考える。合目的的行動をとる場合は、既に述べたように対象の性質を知っていなければならない。やがてそれが強化され、狭い意味のその様な制限を越え、純粋に「知りたい」と云う気持ちになるとき求知心となる。その起源からは多分に変形されているが、やはり「生きるための知恵」の後身であり、合目的的行為の一環としての思惟＝求知心の範囲の働きであると考える。

この様に考えると、この求知心は極めて健全な心の働きである。合理的思考と呼ばれるものもその様な心の働きの一種である。合理的思考は近時種々の事柄から危険視される傾向がほの見えているが、筆者はそれに簡単には賛同できない。

敦はその様な意味における求知心は旺盛であったと思われる。

普通人は慣習に無反省に従う。特殊な自由人は、習慣を点検して見て、それが成立するに至った必然性を実感しない限り、それに従おうとしない。いわば、彼は、人間が其の習慣を形作るに至った何百年かの過程を、一応自己の中に心理的に経験してみないことには気が済まないのである。

私自身の性情も、傾向としては、それに似たものを有っているようだ。そういう特殊な人たちに往々見られる優れた独創的な思考力だけは欠いて。（かめれおん日記）

更に、彼は悟空に仮託して自己を語る。

猿は人真似をすると言うのに、これは又、何と人真似をしない猿だろう！　真似どころか、他人から押付けられた考えは、假令それが何千年の昔から万人に認められている考え方であっても、絶対に受け付けないのだ。自分で充分に納得できない限りは。（悟浄歎異）

余談ながら付け加えると、悟浄歎異で敦が自己を仮託しているのは悟浄であって悟空ではない。悟空は敦のアンティテーゼとして定立されている。勿論両者に同時に自己を語らせることもあろうが、上記の事項に関する限り彼はそれ

ほど意識的ではあるまい。思わず知らず悟空にも自己を語らせた。如何に求知心への「想い」が強かったかが偲ばれる。

さて、この様に求知心は正常な心の働きと考えられるが、その徹底は必ずしも「幸福」をもたらさない。例えば敦の次の「告白」はそれを示している。なぜであろうか、不思議な現象である。

一人の老いたる魚怪が、或時悟浄を見てこう言うた。

「やれ、いたわしや。因果な病にかゝったものじゃ。此の病にかゝったが最後、百人の中九十九人迄は惨めな一生を送らねばなりませぬぞ。……この病に侵された者はな、凡ての物事を素直に受取ることが出来ぬ。何を見ても、何に出会うても『何故？』と直ぐに考える。究極の・正真正銘の・神様だけが御存じの『何故？』を考えようとするのじゃ……。」（悟浄出世）

何より大事なことは、俺の性情にとって、幾ら他人（ひと）に嗤（わら）われようと、斯うした一種の形而上学的といっていい様な不安が他のあらゆる問題に先行するという事実だ。……所で、これに就いて古来提出された幾多の解答は、結局この解疑が不可能だということを余りにも明らかに証明している。してみれば、俺の魂の安静の為の唯一の必要事は『形而上学的迷妄の形而上学的放棄』だということになる。……それでも、どうにもならないのだ。……

結局各人は各様にその素質を展開するより外に手はない。（狼疾記）

自　覚

此処に云う「自覚」とは、標語的に云えば、思考における対象と主体の一致を云う。

自己自身を対象とする思考と言っても、単に自己を対象とするのではなく、自己を思考している自己自身をも思考の対象とする思考である。先にも触れたが「眼は一切を見るが、自らを見ることは出来ない……」にも拘らず「見ている眼を見ようとする」心の働きである。

従って「自覚」は今まで述べてきた云はば「生きるための知恵」とは全く異質のように思われる。

不思議なことだが、「自覚」は「自覚」しない限り決して「自覚」出来ない。

筆者には少年時不思議な経験がある。当時少年倶楽部で「吼える密林」など冒険物語があったが、どの本で読んだかは思い出せないが、ライオンや虎などの「意識」の解説があった。これを読んだ時、筆者は、これでは虎もライオンも眠っているのと同じだ、と感じた。そうして、更に、何故眠っているのと同じ様な状態で餌を取ったり水を飲んだり出来るのだろう、と不思議に思った。その記事の執筆者は多分動物は人間のようには「意識的」に行動しているのではない、と云うことを解説していたのだろう。しかし、少年の身は、自分という意識は当然持っていたが、「意識

的＝自覚的」と云う心の働きは「自覚」したことはなかったので、その記事の意味が分からなかったのは当然である。

「自覚」は徐々に覚醒されるものか突然現れるものなのかは分からないが筆者が「自覚」を「はっきりと自覚」したのは旧制中学四年の時である。登校の途中「いま自分は自分であると云うことを考えている。が、そのこと自体に自分は気づいている。更に、それら二重の自分にもまた、自分は気づいている……。」と、自己自身が無限に重なりあっていて、しかもそれを鳥瞰している自分があり、それを自分は「自覚」していると感じた。何だか足元がふらつくような気持ちになった。それが何処で起こったか、周り状況はどうなっていたかははっきり覚えているが、そのままの状態で登校したのか、夢から覚めるようにふと我にかえって登校したのかは記憶にないが、この時の不思議な経験は今も記憶に残っている。

後に再び触れるが、敦が少年時「宇宙絶滅論」に就いて

不思議なことに、小学生の頃の彼は、全体的な人類の滅亡などという考えにばかり紛れて、個人としての自分の死というものに就いては、それ程直接的な惧れを感じなかった。それを感ずるようになったのは大分後のこと――中学生になってからのことだ。（狼疾記注二）

と述べている。これは「面白い」文章である。

先ず、当然ながら敦は「宇宙絶滅論」を理解している。この「理論」は先の「思考」で述べた「正常な心の働き」

の結果として得られているから、小学生でも俊英であれば理解できる。

しかし「自覚」はそれとは異なる。「個人としての自分の死」と云う事項に関心が薄かったのは、勿論自分という意識はあったろうが、俊英の敦も小学生では「自覚」がなかったので、そこまで思い至らなかったのだろう。

自覚とは、先の記述を援用すれば、神様が人間を作るとき予想しなかった不思議な心の働きである。

処でこの様な自覚という「不思議な」心の働きは、多分、先の「魚怪の悟浄への忠告」や狼疾記での彼の独白が示しているように、求知心の結果であろうが、ではその様な「自覚」はどの様にして「自覚」されたのだろう。

「あい見ての後の心に比ぶれば昔はものを思わざりけり」も一種の自覚だが、「あい見る」きっかけは何だったのだろう。

例えば次の諸句は明らかに「自覚」を物語っている。

「子曰く、由、女に之を知るを誨へんか。之を知るを之を知るとなし、知らざるを知らざるとせよ。是れ知るなり。」（論語・為政第二・十七）

「この人間より私は知恵がある。なぜなら……この男は、知らないのに、何か知っているように思っているが……つまりわたしは知らないことは、知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしい。」（ソクラテス

の無知の知）

「汝自らを知れ＝グノーティ・サウトン」（ディルフォイの碑文）

それらが東西かけ離れた地で奇しくも紀元前五百年前後に「発生」している。ヤスパースが「歴史の起源と目標」で枢軸時代・紀元前八千年より紀元前五千年乃至紀元前二千年としてそれを論じているが筆者にも関心がある。

この項の最後に、冒頭の敦の言『何故俺は俺を俺と思うのか？　他のものを俺と思うても差し支えなかろうに。俺とは一体なんだ？』に就いて。

これは自覚の主客の重層と分離の矛盾を衝いている。

自覚も判断であるからやはり主体と客体はあるが、先に触れた筆者の自覚の経験と同様に、自覚においては主体は自覚的反省の下、瞬時にして客体となり、かくして自覚の意識は無限の連鎖をなして流れる。

処が、自分自身も考察の対象になり得るから、対象としてみるとき自と他には差はない（例えば卑近な例では自と他の身長の比較）。

従って「他のものを俺と思うても差し支えなかろうに」との発言も有り得る。

しかし自覚における客体は、上に見たように主体の変容であるから、「他のものは俺にはなれない」。

自覚は、「木乃伊」のパリスカスの「見た」合わせ鏡のように、目くるめくばかり続く無限の重層である。また後に「死」の項で示すラ・ロシュフコーの箴言に擬えれば「太陽も死も己もじっと見つめることは出来ない」。敦はパリスカスの見た合せ鏡を「見」、ラ・ロシュフコーの箴言に反して「大陽＝己を見つめた」。パリスカスは、見つめることの出来ない己を見つめたことにより、己の精神を破った。ゲーテは「若きヴェルテル」の「死」によって蘇生したと云はれる。敦はパリスカスの狂死により、危くも自己の心のバランスを保ったのであろうか。「俺とは一体何だ？」はこの様な状況下での彼の呻き声である。

空間意識

我々は時間、空間の枠組みの中に生きている。

したがって当然人間には元々空間意識はある。しかしそれはごく限られた生活空間としてのそれであったろう。遥々と来つるものかな、とか、何という広大な空間と言うような感慨は日常生活に固着している限りは生まれないだろう。

以下に非日常的空間意識の幾つかに就いて述べる。

筆者は、ある種の極限境界、例えば高山、極地、砂漠、広大な草原などに対して持つ人間の憧憬と畏怖は不思議な現象と考える。

例えば森林浴などと云われる行動や森林内の散策が人間に好まれるのは、森林から草原に進出したと云う人間発祥の状況から考えてみても、十分納得できる。

けれども先に挙げたような地帯は、何れも人間の生存に不適な地帯である。何故「人々」はこのような境涯に憧れるのか。これは複雑な文化現象だから簡単には言えぬが、筆者は今まで述べて来た人間本来の在り方と関係があると考える。

これらの地帯は特別な理由がない限り普通は人の住むところではない。偶然かどうか、その始まりは別として、それらの地帯に踏み込むことは「新しい」経験である。「新しい事象への好奇心」が元来「動物」にもインプットされているとは先にも触れた通りである。今まで経験しなかった事柄を経験することは、人間の精神にある種の快感を与える。しかしそれのみではない。筆者は意識して先の例に密林や洞窟を入れなかったが、同じく人間の生存に不適な地帯と云っても、密林や洞窟への潜入は、特殊な例を除けば、その他の冒険ほど人気はない。

極地や砂漠は別の要素が含まれると思われるので今は措くが、高山、広大な草原などは何れも「眺望が開けている」。この「眺望が開けている」と云う状態は、森林から草原に進出した人間には、「追うにせよ追われるにせよ」生存にとって重要な要素である。小さい体を精一杯背伸びをして辺りを警戒するプレーリー・ドックと本質的には変わりはない。ヒマラヤ、アルプス、グランドキャニオンを眺める感興は、やはり人間の在り方と深い根で繋がっている。しかしこの様な経験は、直立二足歩行で地上を彷徨する事を本質とする人間には、心の対応はやはり戸惑いがある。それが、対象の壮大さと自己の卑小さを意識の対比となり一種異様な感銘となる。心の一種の自己防衛とも見られるが如何な

ものであろうか。

しかしこれも程度の問題である。完全に「地上から離れ」月面に立った場合はどうであろう。その様な宇宙飛行士チャールズ・デューク、ジェームス・アーウィン、アルフレッド・ウォーデンの記事が平成八年一月五日の朝日新聞に載っていた。

視界が白っぽくなり、やがて漆黒の宇宙に飛び出した。月の軌道に乗る。操縦室で腕を伸ばすと、生命をはぐくむ青い地球が、すっぽり手のひらにおさまっていた……。

月の大地は、灰色の山脈と丘が連なっていた。地平線の向こうに、黒い宇宙空間が切り込んでいた。動くものはない。風もない。まるで生まれた故郷にいるような安心感があった。すぐ後ろに「神」がいそうで、宇宙服の肩ごしに何度も振り返った……。

人が月面を歩いたことより、キリストが地上に降り立った方が遥かに重要だ。それを分からせるため、神は私を月に導いた……。

宇宙ははすべてを超えた『力』がある。始まりも、終わりもない。ただ、すばらしい世界をつくった『意志』

があるだけだ……。

此処に述べられている感想は、月面に立った全ての宇宙飛行士の感想ではない、また、いわゆる宇宙飛行士全体の記述でもないが、読むものをして一種異様な感興に誘う。これは心が本来その様な状況に対処するようには作られい「人間」が、その様な状況におかれた場合の激しい心の揺れ働き(それは殆ど無意識的な自己防衛的反応と思われるが)の軌跡である。これらの感慨にどの程度西欧文明の基幹であるキリスト教の影があるかは分からないが、この内の一人は後にノアの方船(はこ)伝説のトルコのアララット山に、その痕跡を求めて六度も足を運んでいる。宇宙飛行士のイメージとは甚だ異なる。彼らの受けたショックの強さを物語るものだろう。

再び比喩的に云うと、神は、人間が月面に立つ様な事態までは思い至らず、それに応ずる能力を人間に付与することは忘れていたのだろう。

先に不問に付した極地、砂漠に就いて触れる。

極地への志向には功名心とか、科学的調査とか、上記の「一般論」とは異なる別な文化的動機がある。

砂漠への志向も筆者は多分に文化的要素を含むと考える。多くの人がタクラマカン砂漠への郷愁を語る。それでは、それと同一の感興をカラハリ砂漠、サハラ砂漠、ナスカの砂漠、アリゾナの砂漠に感じているのだろうか。多分「ノー」であろう。グランドキャニオンに対する感興は全くその物理的条件のみに依存する。筆者が、砂漠への志向に、単に

物理的条件のみではなく、文化的要素が入ると考えるのは上記のような理由に基づく。

しかし、近頃テレビなどで見ることの出来る南極の風景などには、この世のものと思えぬ美しさがある。寧ろ宇宙空間からの眺望と同質とも思われる。

また、同じくテレビだけの眺めだが、崩れながら音もなく無限に変容して行く砂山の姿も心奪われるような美しさである。こちらが画面トリミングの魔術に掛かっているのだろうか。

敦の作品の「空間性」に就いては後に「かめれおん日記、狼疾記とその系列」の末尾で触れる。

時間の感知

我々は時間、空間の枠組みの中に生きている。

したがって当然人間には元々時間意識はある。しかしそれはごく限られた生活時間としてのそれであったろう。遥かな昔、遠い未来と言うような感慨は日常生活に固着している限りは生まれないだろう。

同じく時間、空間と併称されながら時間は空間より意識し難いように思われる。それは時間に関する形容詞が、「遥かな」昔、「遠い」未来、「長い」あるいわ「短い」時間など、多く空間のそれの転用であることからも分かる。本来的に時間関係を表すと思われる、既に過ぎた、まだ来ない、にも、過ぎる、来ると云うある程度空間的概念が含まれ

ている。

「空間」は見れば感知できる。これに対して、時間性の意識は過去、現在、未来の「同時」着想にあるが、過去と未来は共に「現存」しておらず、現存しているのは「永遠に続く」現在のみである。空間性の意識より時間性の意識の方が難しいのは、時間の持つこの様な「魔性」のせいだろう。

皆寝静まった後、独りストーブが特有の音を立てて燃えている。鉄瓶のたぎる音が微かに響いている。このとき「嗚呼、今、正に時間が過ぎつつある」と感じた。少年時の興味ある経験として筆者は今でも記憶している。

さて広義の時間性の意識は、合目的的行為に付随して起こると筆者は考える。

鳥類や哺乳類が果たして「時間」を「意識」しているかどうかは当方には分からないが、「未来」を志向し、「過去」の知識の蓄積により、これから好都合の結果が招来されるように「現在」ある種の行動をとる、と云うのが合目的的行為である以上、直接的に「意識」する、しないに拘らず、時間は少なくとも潜在的に意識せざるを得ないだろう。「我々」の時間意識も始源的にはそれらと同根であろう。

本稿では当然ながら無限に続く時間を課題とする。

無限に続く時間を意識するようになったのは、勿論農耕による時間意識の強化によるのであろうが、無限の繰り返しの「自覚」がその基礎にあるだろう。敦の「木乃伊」の、無限に続く転生の記憶のように、一度可能であった事項は条件が同じである限り何度でも繰り返されると云う知見である。昨日があれば、昨日の昨日があり、更に昨日の昨日のがあり、更に……と。未来に就いても同様である。明日があれば、明日の明日があり、更に明日の明日の明日があり、更に……と。無限に続く時間の自覚はこの様に知性の当然の帰結である。

処で本来人間はどの程度の時間の長さを意識できるか。何度も繰り返すが人間は直立二足歩行、この地球の上のごく限られた範囲に、意識的にはせいぜい数十年生きるように作られてきた動物である。従って本来の時間意識の範囲はそれにふさわしい程度の筈である。にも拘らず、上記のように、今や永遠の時間を想定している。奇妙ではないか。処が、そういうことの全体を、その様に造られている筈の動物たる我々が知っている。自己循環・矛盾！

この項は後の「無限の時間の中の生と死」に続く。

死

此処で課題とするのは「自己の死」である。「死ぬのは何時も他人」と云う俚諺の示す「他人の死」ではない。余談

になるがこの俚諺の痛烈さはどうだろう。死に関するあらゆるアフォリズムは、この俗諺の前には色褪せて見えるのではなかろうか。

さて自己の死は本来思考の対象とはなり得ない。既に屢々述べてきたように思考は広義の合目的的行為の一環であり、「未来」を志向している。自己の死には未来がない。故に「本来」は自己の死と云う概念は思考になじまない。思考は元々生きるための道具として与えられていたことを想起すべきである。

次に「それ」を示す事例を列挙する。

太陽も死もじっと見つめることは出来ない。（ラ・ロシュフコー）

不可能を志向するのだから当然である。だが死は元々「それ」に尽きない。眼を外らすな、も含意されているだろう。

敦も自己（悟浄）のアンティ・テーゼとしてではあるが、悟空に就いて上述の事項を次のように的確に示している。

人は良く「死ぬ覚悟で」などと云うが、悟空という男は決して死ぬ覚悟なんかしない。どんな危険に陥った場合でも、彼は唯、今自分のしている仕事の成否を憂えるだけで、自分の生命のことなどは、てんで考えの中に浮かんで来ないのである。……此の男は、自分の寿命とか生命とかに就いて考えたこともないに違いない。彼の死ぬ時は、ポクンと、自分でも知らずに死んでいるだろう。その一瞬前迄は潑剌と暴れ廻っているに違いない。（悟

浄歎異）

論語に云う（先進第十一）

季路鬼神に事ふることを問う。子曰く、未だ人に事ふること能はず。焉んぞ能く鬼神に事えん。敢えて死を問う。曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや。

筆者はこの様な考えは健全だと思うのだが、敦は

彼は、「未だ生を知らず、いずくんぞ死を知らん」などと言った男を憎んだ。「未だ死を知らず、いずくんぞ生を知らん」と感ずるような素質を享けた人間だつてあるんだ、と考えたのである。（狼疾記注一）

と述べている。尤も敦のこの考えは、後の作品「弟子」における彼の孔子に対する見解と矛盾するようにも見える。これらは彼の心のなかでどの様に調和していたのだろうか。

上述の理由より、死は語り難い。従って以下、死をめぐりいくつかの断章を綴る。

思想を生み出し形成するということは大変なエネルギーを要する行為である。死ぬほど辛いという言葉がある。正に死なんとしているときはエネルギーはゼロに収束しつつある。死に瀕している人は、元気なときとは全く人格が変わっている、平生との連続性はないと考えるべきである。

漱石の死もこの例にもれない。則天去私を唱え

死は私のない天に帰ることである。その意味で死は、私から脱却しきれない、生より尊いものであることは、言うでもない。（小宮豊隆・夏目漱石）

と平生述べていた漱石が、死の床で

そのうち漱石は非常に苦しみ出し、自分の胸をあけて、早くこゝへ水をぶっかけてくれ、死ぬと困るからと言ったかと思うと、人事不省になり全く意識を失ってしまった。（小宮豊隆・夏目漱石）

漱石の弟子達は日頃尊敬している先生のこの生死のあまりの乖離に狼狽し、漱石の死後、色々と「弁護」をしたが、その様な必要は全くない。このことは当然であり、何も漱石を貶めることにはならない。寧ろその様な狼狽に弟子達の生理的な、そうして、結果的には思考的にも「若さ」が出た。

高名な作家が、死の床にあって「洗礼」を受けたという記事に接することがある。人の心の深部は計り難いが、仮に生前のそれらの人々の思潮との乖離を感ずることがあるとしても、上記のような理由が考えられるだろう。

この様に考えてくると、「幸運に恵まれれば」、悟空の様に「自分の寿命とか生命とかに就いて考えたこともなく、死ぬときは、その一瞬前までは潑剌と暴れ廻り、自分でも知らずにポクンと、死ぬ」可能性もあるのに、活力のある人々が、敦を含めて、専ら死を思うのは不自然であり、ある意味では当人にとっても悲劇である。

人間は死と不幸と無知とを癒すことが出来なかったので、幸福になるためにそれらのことに就いて考えないことにした。（パスカル）

我々は絶壁が見えないようにするために、何か目を遮るものを前方に置いた後、安心して絶壁の方へ走っているのである。（パスカル）

生まれてきた以上は死んで行かねばならず、生きている限りは不幸から逃れることを得ない、と云うこと以外に何も確実なことはない。（クリチアス）

これらは何やら寝た子をおこす様な気配はないか。

いざ死ぬときは、死に就いて何も考えない、頭は働かない。死に就いてあれやこれやなど考えるそんな余裕はない。ああ死ぬのだと思って死ぬのではなかろうか。

以上は、主として、「自己の死」は本来思考の対象とはなり得ない、と云う観点から「自己の死」を語ってきたが、この様に語っていること自体が実は「自己の死」は無視できない強大な思考の対象であることを物語っている。「自己の死」は語ることの出来ないものであり、同時に、語らざるを得ないものである。上記のラ・ロシュフコーの警句は「自己の死」の、この様な両面を見事に示している。此処にも先に述べた「人間的存在」の自己矛盾の一端が現れている。

既に「我々」は「意識」を持って仕舞った。ある意味では禁断の木の実を食べてしまった。自己の死を意識せざるを得ない。

自己の死を考えても戸惑うばかりである。処方箋は何処に求むべきか。

敦は狼疾記注二で

人間の誰もが、こんな恐怖を味あわねばならぬように出来ていることが何としても不都合に思えたのである

と述べている。彼の示した自然さに信依し、これより慰謝を得られるだろうか。

敦の、「自己の死」を含め、死に就いての記述は、かめれおん日記、狼疾記、木乃伊などに見られるが、次項の「無限の時間の中の生と死」の註（ア）で示してある理由に基づき、それらは、その項に吸収することにする。また後述の「かめれおん日記、狼疾記とその系列」の「木乃伊」に関係の記述がある。

無限の時間の中の生と死

無限の時間の中の生と死に関しては、既にその一例を本稿の冒頭に示したが、敦は、「宇宙論的見地」から、このことに就いてかなり執拗に語っている。

例えば狼疾記に

地球が冷却するのや、人類(ア)が滅びるのは、まだしも我慢が出来た。……太陽も冷えて、消えて、真暗な空間をただぐるぐると誰にも見られずに黒い冷(つめ)たい星共(ほしども)が廻っているだけになって了う。……人類が無くなったあとの・無意義な・真黒な・無限の時の流れを想像して、恐ろしさに堪えられず、アッと大きな声を出して跳上がったりすることが多かった。

筆者もまた少年時同様の経験を持った。夜、寝ていると不思議な想念が浮かんでくる。地球も太陽も何もかもない、それらが、あるのかないのかさえ意識にのぼらない、何一つない真っ暗な空間が、ただ永遠に続いている。その場合、筆者も敦と同様に、自己の死は殆ど念頭になかった。敦はその様な状況下で可愛いがっていた犬との交流を描いているが、筆者の場合いは向かいの家の庭の小さなトキシラズの花とコスモスである。自分が死んでもあのトキシラズやコスモスはずつと明るい日差しの中で咲き続けるだろう、それが不思議と慰謝になっていた。しかし何もかも「なくなる」のだ。無限の時間の中の一切の死である。絶対の無。少年がその様な恐怖に堪えられるはずがない。思わず床から立ち上がり室内を彷徨する。この苦しみは親にも告げられない。何の慰謝にもならぬことを知っていたからである。

私的なことを語ったが、この様な「経験の共有」が、敦に対する筆者のシンパシーの基礎になっているからである。実はこの小論の基礎にも。

この様な「認識」が人間精神にもたらす影響は甚大なものがあると思われる。先の月面に立った宇宙飛行士の感興との比較はどうであろうか。敦自身も主として狼疾記で、数多くのその精神的「後遺症」に就いて語っている。「存在の不確かさ」も、彼の強い自我意識と連合されているので簡単には言えぬが、確かにその後遺症の一つである。しかし、筆者の最も感ずるのは、無限の時の流れの中の存在の、か細さである。少年の敦が感じた

　麾下数万の軍勢を見渡しながら、百年後には此の中の一人も生き残っていないであろうことを考えて涕泣したというペルシャの王様のように、此の少年は、今や、自己の周囲の凡てに「限られたもののしるし」を認めて胸をさゝれるのであった。（狼疾記注二）

と云う想念である。

さて、この様な「課題」に対して、敦自身どの様な「解答」を与えているだろうか。

　時として極く稀に、歓ばしい昂揚された瞬間がないでもなかった。生とは、黒洞々たる無限の時間と空間との間を劈（つんざ）いて奔（はし）る閃光と思われ、周囲の闇が暗ければ暗いだけ、又閃く瞬間が短ければ短いだけ、その光の美しさ・貴さは加わるのだ、と真実その様に信じられることも、時としてある。（狼疾記）

彼は正直に、「時として極く稀に、歓ばしい昂揚された瞬間がないでもなかった。」と述べており、さらに上文に続けて

　併し、変転し易い彼の気持ちは……一層惨めなあじきなさの中に自（みずか）らを見出すのが常である

と添付している。

次の敦の記述は、上述の論旨とは些か旗幟を異にしているように見える。

俺は先刻から仰向けに寝ころんだ侭、木の葉の隙から覗く星共を見上げている。寂しい。何かひどく寂しい。自分があの淋しい星の上にたった独りで立って、真暗な・冷たい・何も無い世界の夜を眺めているような気がする。星という奴は、以前から、永遠だの無限だのという事を考えさせるので、どうも苦手だ。……そのずっと下の方に、稍〻黄色味を帯びた暖かそうな星がある……其の時不図俺は、三蔵法師の澄んだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見詰めているような・何物かに対する憫れみを何時も湛えているような眼である。……師父は何時も永遠を見ていられる。……何時かは来る滅亡の前に、それでも可憐に花開こうとする叡智や愛情や、そうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝乎と愍れみの眼差しを注いでをられるのではなかろうか。（悟浄嘆異）

星、真っ黒な・冷たい、寂しい、独り、暖かそうな、と前半は如何にも敦らしい文言が連ねられているが、後半の「救済」は先の例示に比して肯定的要素が強い。先の文は断章としての信条告白なので割合に正直に告げられているが、後者は小説の一句である。「悟浄嘆異」では、敦は悟浄、悟空に自己を仮託して、小説としては割合に正直に「自己」を語っているが、小説の構成上やはり文飾・虚構もありうる。後者と、先の例示の「時として極く稀に、歓ばしい昂揚された瞬間」と付言した心境、との関係を知りたい。

「無限の時間の中の生と死」に就いての筆者の見解は既に明かであろう。自覚、極限境界への憧憬、無限の時間の認識、自己の死の場合と同じである。この様な事態に想いを至すものは、敦を含めて、皆「限界状態」に在る。処方箋はもうない。心は危うくもバランスを保つ。苦悩はその現れである。

註(ア)　此処で「人類が滅びるのは、まだしも我慢が出来た」とあるのは敦の文飾である。先の自覚の項でも触れたように「全体的な人類の滅亡などと云う考えにばかり紛れて、個人としての自分の死というものに就いては、それほど直接的な惧れを感じなかった」と敦は云っている、関心がなければ「と云う考えにばかり紛れ」ることはない。敦が個人の死より人類の死を恐れたのは必ずしも「自覚」が足らなかっただけではなく、個体の維持よりも種の維持が「生命」では重要だからであり、「地球の終わり」は種の絶滅を意味するので、一層の恐怖を感じたのである。遺伝子の命令はそれほど強いのである。

かめれおん日記、狼疾記とその系列

さて、この様に考えてくると、筆者にはかめれおん日記と狼疾記は何やら宝の山のように思われてくる。そこには敦の生の声が無造作に配置されている。感覚と観念の認識論的対比、激しい自我意識、強い求知心、死、自虐、尊大な自尊心、存在の不確かさ、分解癖、宇宙における人間の地位、それに関連して生ずる様々な想念、等々。

これらはそれぞれ単独に、あるいは連合されて後の敦の作品のテーマになっている。彼の作品のある部分は、此処で醸し出された思想を核として形成されたように思われる。「かめれおん日記」と「狼疾記」は云はば原資料である。あれほど意識的だった敦が、意識せずして自ら自分の作品の解説を書いているようなものである。

次に、これらの「思想」がどの様に作品に形成されているかを考察して見る。作者の立場で考えれば一層事態は明白になるのではなかろうか。冗談だが、かめれおん日記と狼疾記に山積しているテーマの自由な組み合わせにより、幾らでも作品が作れ相な気がするほどである。

先ず「かめれおん日記」や「狼疾記」との関連としての「わが西遊記」の「位置」から。

筆者は「思想と作品」の観点では、作製の時期は扨て措き、内容から云うと、「わが西遊記」は「中継」の位置にあると考える。

「わが西遊記」は勿論私記ではないから、小説の結構を持っているが、悟浄、悟空に仮託しての敦の独白である。しかもその内容は「かめれおん日記」や「狼疾記」の原資料の「敷衍（ふえん）」である。悟浄の前に次々と現れる妖怪（仮装した哲学者）は、敦の知的スパーリングの相手である。従って「原資料」の思想的意味合いが、よりはっきりしてくる。「敷衍（ふえん）」と云ったのはその意味である。しかし、「わが西遊記」はそれらの思想を核として造られた作品ではなく、思想を確認するための作品である。敦自身の発言としてではなく、悟浄、悟空に自己を仮託して語らせている点や、「か

めれおん日記」や「狼疾記」に提示されていた「問題」の「解決」を求めている点などは新しい要素だが、本質的には「かめれおん日記」や「狼疾記」と変わりはない。

誤解を避けるために一言付加する。此処では「わが西遊記」の作品論を行っているのではない。況や価値判断を下しているのでもない。「原資料」と作品の関係として論じているのである。作品論はまた別である。価値判断も。

以下主として、狐憑、木乃伊、文字禍、寂しい島に就いて上記の観点から考察する。

狐憑

この小説の核心は

「ホメロスと呼ばれた盲人（めくら）のマエオニデェスがあの美しい歌どもを唱い出すよりずっと以前に、斯うして一人の詩人が喰われて了ったことを、誰も知らない。」

と云う「最後の一句」にある。

これはその侭、我々の既に熟知している、「無限の時間と空間との間（はざま）の一瞬の閃光」に対する愛惜の念である。

さてこのテーマを作品としてどの様に具体化するかが作者の守備範囲になる。

周知の通り物語は知と不知の間に成立する。

物語は虚構である。熟知している場ではそらぞらしい。

物語にはリアリティが必要だ。シンパシーは不知の状況には成立しない。
舞台は何処にするか。シナではまずい。読者は知りすぎていて違和感を抱くだろう。アフリカはどうか。余り離れすぎていてシンパシーは湧かぬだろう。ホメロスの前だから当然無文字文化圏だ。結局、敦はスキタイ人を撰んだ。
主人公が空しく死んでしまったことを後世の「誰も知らない」から「我々」は愛惜の念を持つ。ではどの様に死なせるか。死に様は何も「喰われて了う」に限るまい。炎々たる火中に消えた、でもよい。しかしそれでは勇壮すぎる。
主人公は侘びしく死んだ方がよい。「しゃぶり終わってから骨を遠くへほうると、水音がして、骨は湖に沈んだ」としたらどうだろう。これがよい。水だ。かくして水上生活者と云う条件加わる。「喰われて了う」にはそれなりの必然性がなければならない。主人公のシャクの詩人たるパーソナリティと共に、その様な「悲運」を招来した状況も書き込む……。
この様にして作品は造られて行く……のかどうかは分からないが、この様に再構成することもできるだろう。
狐憑は一定の方針により構成された小説であり、そのテーマは既に作者には確立されており、テーマ自体の正否に就いての考察はもうない。「わが西遊記」は原資料の敷衍である。狐憑はこの点で「わが西遊記」と明らかに異なる。
筆者は意識的にテーマから作品への移行への仮想で、多くの選択肢を示した。当然ながら同一のテーマからも多様な作品が形成される可能性があるからである。敦のその一つを「狐憑」として撰んだ。上記の事項は同時に敦の独創性を示すことになる。

木乃伊

これも最後の

「合わせ鏡のように、無限に内に畳まれて行く不気味な記憶の連続が、無限――に目くるめくばかり無限に続いているのではないか？」……パリスカスは……明らかに狂気の徴候を見せて……

がテーマである。

此処に転生を着想したのは敦の見事な独創である。

合わせ鏡のように目くるめくばかり続く無限、これは自覚の重層性、無限の時間の意識、で既にお馴染みの思想である。しかしこれだけでは単に信条告白に留まる。

此処で転生を入れたため、転生→前生→前生の前生→更にその前生……と無限の連鎖が眼前に現れ、観念は具体化された。当然敦が夢寐にも忘れられなかった「己の死」が現れる。死に就いては敦は既に「かめれおん日記」や「狼疾記」で

私の心に時々浮かんでくる想像――一生の終わりに臨んで必ず感じるであろう・自分の一生の短さの果敢なさの感じ（本当に肉体的な、その感覚）を直接（じか）に想像して見る癖が、私にはある――が、又ふっと心を掠めた。

中学に入ってから……『死というもの』を――抽象的な死の概念ではなく……直接的な死を考えた。自分の臨終の時の気持ちを考え……

と書いている。これはその侭、木乃伊の

又一つの情景が現れる。自分は酷(ひど)い熱で床の上に寝ているらしい。傍に妻の心配そうな顔が覗いている。……蒼い大きな翳(かげ)が自分の上にかぶさって来る。目の眩(くら)むような下降感に思わず眼を閉じる。

に応じている。

では転生にリアリティを持たせるにはどの様な枠組みを撰べば良いか。「種々考察」の結果、彼はカンビセスのエジプト遠征時の一部将パリスカスを主人公に撰んだ。

転生や前生の記憶の想起を、保存されていた自己のミイラとの対面と云う形で具体化し、死の描写を挿入して「合わせ鏡のように、……目くるめくばかり無限に続く」世界の深淵を、眼前に顕現化して見せた敦の手腕は見事と云う外はない。

文字禍

これは稍複雑であるが、テーマが既に「宝の山」に存在している点では前二者と異ならない。分解癖よりの文字の仮象性の暴露（象形文字は形と意味に連続性はあるがそれでも約束ごとである）、文字→読書→観念過剰、此処で「わが西遊記」でお馴染みの観念と行動の対比が現れる。文字の仮象性のアンティテーゼとしての文字の精霊、これは文字禍で初見、しかしその様なアンティテーゼを定立したくなるほど仮象でありながら実在性を持つ文字の魔性に魅せられたのだろう。

さてこの様なテーマを実現する枠組みは如何。

漢字はあまりに我々に慣れすぎていて、「分解癖よりの文字の仮象性の暴露」に用いるには無理がある。文字を独創したのは漢字の他は楔型文字のみと云われている。（この場合はエジプト文字は楔型文字の借用と見ている）。

精霊もでてくるのだから架空性が欲しい。同様の理由により舞台は古代。精霊の住処として図書館も欲しい。あまり使いすぎたかも知れぬが、「丁度、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように、すつかり埋（うも）れて消えて了う」（山月記・但し文の順序は変えてある）のも悪くない。幸いニネベの図書館の再発掘の話しも聞いた。従って古代メソポタミヤ文化圏だ。では……と撰んだのかも知れない。

文字禍には「かめれおん日記」や「狼疾記」には見られなかった歴史の記録性への討議が見られるが、これは敦の思考が「限界領域」から「文学」へ移行し始めたことを示すのかも知れない。

また、文字禍には、狐憑や木乃伊の様に、一句よく全文を集約するような表現はない。最後に、図書館は崩壊し、ナブ・アヘ・エリバは埋没するが、狐憑や木乃伊の場合の様な迫力はない。これは多分にテーマが前二者の様に集中せず多元的であったためと思われる。その点物語としては複雑になり面白さにも反映する。あるいはこれは作者にとって視野の拡大として歓迎すべきことだったのかも知れない。

高名な山月記は思想的には「限界領域」とはあまりつながらない。「宝の山」にある自虐、尊大な自尊心や、前の文字禍の項で引用した滅亡（ほろび）に就いての「常套句」が散見される程度である。山月記の美点は他の箇所にある。此処では

「作品論」は行わないのでこれ以上は触れない。

「環礁」の「寂しい島」はその一部を冒頭で示した通りである。前半は、その結語を導くに足る結構を持っていて、全体の構成に乱れはない。

以上「かめれおん日記」や「狼疾記」（一部「わが西遊記」を含む）に提示されている「思想」と狐憑、木乃伊、文字禍、寂しい島、などとの関連に就きのべた。

最後に先に宿題とした提示しておいた敦の作品の「空間性」に就いて簡単に触れる。

敦は確かに「はるかな国、とおい昔」の気風を持ち、作品の舞台も広大である。しかし、上記のように見てくると、中国ものを除けば、敦の作品は先に「舞台」が決まるのではなく、「物語」をより的確に表現するための場として、「後に」撰ばれたように思われる。それが「物語」の性質上「はるかな国」となる。勿論その様な題材を撰ぶこと自体が「はるかな国、とおい昔」に通ずる彼の潜在的意識のなせる業ではあろうが。

「空間性」に則して中国ものを論ずるには別の観点が必要になるので今回は触れない。